

**研究拠点形成事業
平成 29 年度 実施報告書**

A. (平成 26～29 年度採択課題用) 先端拠点形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	東京大学東洋文化研究所
アメリカ拠点機関：	プリンストン大学
フランス拠点機関：	社会科学高等研究院
ドイツ拠点機関：	ベルリン・フンボルト大学

2. 研究交流課題名

(和文)：新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築
(交流分野： 歴史学)

(英文)：Global History Collaborative
(交流分野： History)

研究交流課題に係るホームページ：[http:// coretocore.ioc.u-tokyo.ac.jp/](http://coretocore.ioc.u-tokyo.ac.jp/)

3. 採用期間

平成 26 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日
(4 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：東京大学東洋文化研究所

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：東洋文化研究所・所長・榊屋友子

協力機関：なし

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：東洋文化研究所・教授・羽田正

事務組織：東京大学東洋文化研究所事務部

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：アメリカ合衆国

拠点機関：(英文) Princeton University

(和文) プリンストン大学

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Department of History・Professor
・Jeremy ADELMAN

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

経費負担区分 (A 型)：パターン 1

(2) 国名：フランス共和国

拠点機関：(英文) Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales

(和文) 社会科学高等研究院

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Research Centre for History・Professor
・Alessandro STANZIANI

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

経費負担区分 (A型)：パターン1

(3) 国名：ドイツ連邦共和国

拠点機関：(英文) Berlin Humboldt University

(和文) ベルリン・フンボルト大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Institute of Asian and African Studies
・Professor・Andreas ECKERT

協力機関：(英文) Berlin Free University

(和文) ベルリン・自由大学

経費負担区分 (A型)：パターン1

5. 研究交流目標

5-1. 全期間を通じた研究交流目標

1. 新しい世界史理解と叙述の探求と確立：従来、世界各地における世界史の見方は、ヨーロッパ中心史観を下敷きとするという点では共通点を持ちながらも、国や地域によって多様だった。この多様な世界史の見方を拠点間で相互に参照・批判するとともに、現代世界において必要な地球への帰属意識（地球市民意識）を共有できる新しい世界史の理解と叙述の方法を、拠点間の議論を通じて探求し確立する。

2. ミクロな歴史研究との交流：新しい世界史研究の成果を、一国史や地域史などミクロ・レベルの歴史の研究者に投げかけて当該研究領域における既存の知の再検討を促す。また、その再検討結果を新しい世界史の解釈に活用する。この相互往復運動の繰り返しによって、歴史研究全体の活性化を図る。

3. 上記2つの大目標を達成するために、4研究機関が緊密に連携し、新しい世界史研究と教育のためのネットワーク型拠点を構築する。このネットワークによって実現を図る主な事業は次のとおりである。

①研究者の交流：毎年一定数の研究者、PDを他の3拠点機関に派遣し、同時に3拠点機関から研究者を受け入れる。派遣・受け入れ研究者は、派遣先・受け入れ先で講演や授業を行い、国際共同研究に参画する。

②①と連動させる形で、毎年いずれかの拠点機関でテーマを定めた研究集会とセミナーを開催する。

③毎夏、いずれかの拠点機関で公開サマースクールを開講し、4拠点機関の大学院学生を中心に広く世界の若手研究者に世界史学習と研究交流の場を提供する。また、博士論文を準備中の大学院生に対して、4拠点機関の研究者からなる指導チームを編成し、より完成度の高い論文が執筆できるように共同で指導する。

5-2. 平成29年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

これまでの事業を通じて形成された4拠点間の相互理解と協力関係をさらに深化させ、安定的な教育研究協力体制を構築する。そのために、テーマを定めた新たな共同研究を目指す4拠点共同のセミナーやサマースクールを開催する。また、ネットワークの充実と拡大を目指し、世界各地で活動しているグローバル・ヒストリー研究者との連携を図る。具体的には、中国の大学における講演と学術交流や、海外3拠点以外の研究者との共催ワークショップ、海外3拠点以外の研究者の参加するワークショップの開催などを考えている。

<学術的観点>

4拠点の研究者が執筆したグローバル・ヒストリーに関する論文集『グローバル・ヒストリーの可能性』を日本語で刊行する。また、“national(ist) histories of globalization or world-making”を共同研究の新たなテーマとして設定し、グローバル化する世界を背景に、世界各地で国民史がどのように形成されてきたのかについて、共通の理解を得るための事例を報告するセミナーを、ベルリンとプリンストンで開催する。また、その成果を論文集として公表する準備を進める。

<若手研究者育成>

第3回4拠点共同サマースクールをベルリン・フンボルト大学で開催し、各拠点から参加する複数の研究者が共同で大学院学生を指導する。第2回東大ープリンストン・ウィンタースクールをプリンストン大学で開催する。また、意欲あるPDや大学院学生を1～6か月間海外の拠点に派遣し、知見と視野の拡大、研究テーマに関する海外研究者による指導の機会を与えるとともに、海外3拠点からの若手研究者を東大拠点で受け入れ、双方向の学術交流を進める。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

日本国内において、新しい世界史/グローバル・ヒストリー的な歴史研究への理解を深め、それを根付かせるための取組を企画し、実行する。上記の論文集刊行はその一環であるが、それ以外にも、協力研究者による講演や研究会、一般向けのインタビューなどを実施する。

6. 平成29年度研究交流成果

(交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。)

6-1 研究協力体制の構築状況

これまで3年の活動に本年度のそれを加え、4拠点間の研究協力体制は十分に構築され、順調に機能するようになった。以下で具体的に述べるように、研究者と大学院学生の交流は盛んにおこなわれている。また、共同研究やそれをもとにした具体的な研究成果も現れてきた。

東京拠点では、世界史／グローバル・ヒストリー研究分野の交流が、4拠点だけに閉じた活動とならないように努めている。本年度はアムステルダム大学の研究者との共催による関連研究集会（EHESSEからの貢献あり）、マカレスター・カレッジ研究者によるセミナーを開催したほか、代表研究者の羽田が、南京大学、東華大学（ともに中国）、El Colegio de Mexico（メキシコ）で講演を行い、ネットワークの拡充を図った。

6-2 学術面の成果

研究者交流は、本年も数多く行われた。東京からは、プリンストン、ベルリン、パリの各拠点を1名ずつの研究者が訪問し、研究発表を行うとともに各方面との学術交流を積極的に行った。東京へは、プリンストンから2名、パリから2名の研究者が訪れ、講演を行い、関係研究者と意見交換の機会を持った。これらの密度の濃い学術交流は、今後の国際共同教育・研究の確固たる基盤となるはずである。

2015年度に東京大学で開催したシンポジウムでの報告を核とする論文集『グローバル・ヒストリーの可能性』が出版された。これは4拠点から各3～4人の研究者が寄稿し、4か国におけるグローバル・ヒストリー研究の歴史と現状、グローバル・ヒストリーの方法を紹介するとともに、それらの方法を用いた実際の研究成果をも掲載する意欲的な論集である。各拠点の主要な研究者が揃って執筆したこの論集は、GHCの緊密なネットワークがあっちはじめて実現したと言えるだろう。この論集の出版は、日本におけるグローバル・ヒストリー研究が、国際的な研究動向と緊密に絡み合いながら展開するという新しい段階に入ったことを示している。

プリンストン大学のエイデルマン教授を責任者として、National Narratives of Global Integrationというタイトルの共同研究ワークショップが、昨年度中にすでに2度開催され、東京拠点はこのワークショップでの議論の活性化に大いに貢献している。あと1～2回のワークショップを経たのちに出版される予定の論集にも、2～3人の研究者が寄稿する予定である。

さらに、本拠点形成事業による支援が終了した後、どのようにネットワークを維持し発展させるかという点についても、4拠点間で話し合いが始まった。パリ拠点は、新たな外部資金獲得のために、共同研究のテーマをいくつか提案し、拠点の責任者の間でメールによる意見交換が続いている。

6-3 若手研究者育成

1) 第3回 GHC サマースクールをベルリン・フンボルト大学で開催し(2017/9/2~9/11)、東京拠点からは大学院学生4名と研究者3名が参加した。サマースクールでは、個々の学生による博士論文計画について、全員で議論し、助言がなされた。各学生にとって、きわめて有益なイベントとなった。

2) 2名の大学院学生を、ベルリン自由大学に派遣した。滞在期間は、3ヶ月と6ヶ月。2名の学生は、受け入れ教員の指導のもとで、授業に出席し、自らの研究を報告した。また、1名のポスドク研究員をプリンストン大学に派遣し、この研究員は自らの研究成果を報告し、関連研究者との学術交流を積極的に行った。

3) 第2回東大-プリンストン・ウインタースクールを、プリンストン大学で開催した(2018/1/25)。両大学から、大学院学生各3名、研究者2名が参加し、学生各自の博士論文計画について、意見と情報の交換が行われた。

4) 東京拠点である東洋文化研究所に滞在する海外若手研究者と日本のPDや博士課程学生を対象とするセミナーを2回開催した。合計7人の海外若手研究者が報告を行ない、東大で学ぶ学生との間で有益な意見交換の機会となった。

5) 本拠点形成事業の第1回サマースクール(2015年)に参加し、その後プリンストン大学へ6か月間派遣された大学院学生が、博士号を取得し、2018年度から名古屋大学で助教として勤務することとなった。また、今年度のベルリンでのサマースクールに参加した大学院学生が博士論文を完成させ、同じく2018年度から大阪大学で助教として勤務することになった。

6-4 その他(社会貢献や独自の目的等)

グローバル・ヒストリーの方法を用いた新しい世界史の解釈をイラストや漫画で示す一般向けの書籍の編集・出版を進めている。代表研究者が監修した絵本『輪切りで見える! パノラマ世界史』全5巻(2015-16年刊行)は、中国語に翻訳され、復旦大学出版社から2018年度中に出版される。漫画世界の歴史は、本事業終了時点での刊行は難しいが、特に小中学生に新しい世界史を説明するための重要なツールと考え、時間を割いて編集作業を行っている。

6-5 今後の課題・問題点

本事業終了後の国際ネットワーク維持・発展について、4拠点間での協議を開始している。

6-6 本研究交流事業により発表された論文等

- (1) 平成29年度に学術雑誌等に発表した論文・著書 28本
うち、相手国参加研究者との共著 2本
 - (2) 平成29年度の国際会議における発表 27件
うち、相手国参加研究者との共同発表 5件
 - (3) 平成29年度の国内学会・シンポジウム等における発表 12件
うち、相手国参加研究者との共同発表 0件
- (※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)
- (※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

7. 平成29年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成26年度	研究終了年度	平成30年度
研究課題名	(和文) 新しい世界史/グローバル・ヒストリーの方法 (英文) Methodology of World/Global History				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 羽田正・東京大学東洋文化研究所・教授 (英文) HANEDA Masashi・Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo・Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Jeremy ADELMAN・Princeton University・Professor Alessandro STANZIANI・EHESS・Professor Andreas ECKERT・Berlin Humboldt University・Professor				
29年度の研究 交流活動	<p>1. 主要研究者による研究集会の開催</p> <p>各拠点主要研究者が9月、ベルリンに集まり、前年の東京会議以来メールで行ってきた共同研究のテーマ“National Narratives of Global Integration”の具体的な内容と今後の進め方について議論した。続いて2018年1月にプリンストンで開催された第4回共同セミナーでは、4拠点の研究者に加えて北京大学の包茂紅教授も招き、同テーマについて、議論をさらに深めた。</p> <p>2. 講演会、国際ワークショップの開催</p> <p>本年度も、海外研究者を招いての講演会を計8回、国際シンポジウムを2回(テーマ:グローバルアート・グローバル・ヒストリーとの対話 於:京都+福岡+東京、テーマ:グローバル・ヒストリーにおけるジェンダー・空間・都市 於:東京)、若手研究者報告会を2回、海外研究機関との交流研究会を1回開催した。また、本年度刊行された『グローバル・ヒストリーの可能性』の合評会及び研究集会を開催し、本拠点に所属する研究者や大学院学生の多くが(28名)出席した。</p> <p>3. 海外拠点への研究者派遣</p> <p>研究者を米プリンストン大学へ2名、フランス EHESS に1名、ドイツベルリン自由大学に1名派遣し、研究交流を図ると共に、セミナー・授業にて発表を行った。GHC 大学院学生派遣プログラムにより、大学院学生を2名、ベルリン自由大学に長期派遣(6ヶ月、3ヶ月)した。</p> <p>4. サマースクールの開催</p> <p>2017年9月7日~13日、ベルリン・フンボルト大学で4拠点の大学院学生を対象とする第3回サマースクールを開催した。各拠点から大学院学生が集まり、各拠点の研究者の指導の下、発表・討議を行った。東京拠点からは4名の大学院学生が参加し、3名の研究者が指導にあたった。</p>				

	<p>5. 東大-プリンストン・ウィンタースクールの開催 2018年1月25日、プリンストン大学において、第2回ウィンタースクールを開催した。東京拠点から大学院学生3名、研究者2名を派遣し発表・討議を行った。</p> <p>6. 双方向での教育研究交流の一環として、東京から大学院学生を2名、ベルリン自由大学に長期派遣（6ヶ月、3ヶ月）し、プリンストン大から3名の大学院学生を長期で受け入れた。</p> <p>7. リーダーの羽田が、南京大学、東華大学、メキシコ El Colegio de Mexico を訪問し、講演や研究交流を行い、拠点外の世界のグローバル・ヒストリー研究者との交流を図った。</p>
<p>29年度の研究 交流活動から得 られた成果</p>	<p>1. 世界史/グローバル・ヒストリー研究における4拠点間での教育研究交流がさらに深化したことにより、安定的な研究協力体制が構築されたこと。</p> <p>2. サマースクールや若手研究者派遣と受入を通じて、大学院学生を4拠点の研究者が共同で指導する体制が確立したことにより、次世代の世界レベル研究者の養成が可能となったこと。</p> <p>3. 他の3拠点の指導的な研究者が日本を訪れたことにより、彼らの存在が日本の歴史学界に刺激を与えるようになったこと。また、彼らが日本の歴史学界の質の高さと重要性を認識するようにもなったこと。</p> <p>4. 本事業に参加している内外の研究者13名が共同で執筆するグローバル・ヒストリーに関する研究書『グローバル・ヒストリーの可能性』を日本語で刊行した。また、東京大学出版会による「シリーズ・グローバル・ヒストリー」の刊行が始まり、研究代表者の羽田による『グローバル化と世界史』が出版された。この本は、本拠点形成事業によって実現した国際的な教育研究ネットワークによって得られた知見をフルに活用して執筆された。</p> <p>5. 「世界の一体化をめぐる一国史的言説(“National narratives of global integration”)」をテーマとする共同研究が開始され、複数の東京拠点研究者がそれに参加した。</p> <p>6. 長崎大で『グローバル・ヒストリーの可能性』の書評研究会を開催し、普段東京での研究会にはなかなか参加できない研究者や長崎大の研究者との交流を行った。</p> <p>7. 4拠点外の世界の研究機関や研究者との交流が進展し、グローバル・ヒストリー/世界史に関する教育研究ネットワークが充実、拡大したこと。</p>

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「新しい世界史/グローバル・ストーリー共同研究拠点の構築」(一国史の叙述と世界観) (英文) JSPS Core-to-Core Program “Global History Collaborative” “national(ist) histories of globalization or world-making “
開催期間	平成30年1月26日 ~ 平成30年1月27日 (2日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) アメリカ、プリンストン、プリンストン大学 (英文) U.S.A, Princeton, Princeton University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 羽田正、東京大学東洋文化研究所・教授 (英文) HANEDA Masashi・Professor, Institute for Advanced Studies on Asia・The University of Tokyo
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) Jeremy ADELMAN・Professor・Princeton University

参加者数

派遣先 派遣元	派遣先	セミナー開催国 (アメリカ)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	5/ 32	
	B.	0	
アメリカ 〈人／人日〉	A.	10/ 20	
	B.	0	
フランス 〈人／人日〉	A.	2/ 8	
	B.	0	
ドイツ 〈人／人日〉	A.	2/ 8	
	B.	0	
合計 〈人／人日〉	A.	19/ 68	
	B.	0	

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	Global History Collaborative の4つの拠点が共同で取り組む研究テーマ（世界の一体化をめぐる一国史的言説）について、主要な研究者が集まって互いに自らの知見を報告するとともに、情報と意見を交換し、論集出版の可能性について話し合う。		
セミナーの成果	世界の一体化によって各地で同様の現象が生じているにもかかわらず、その現象はしばしば一国史の枠組みで解釈され、理解される。その背景には、世界情勢とその国の関係についての「常識」が半ば無意識のうちに織り込まれている。この共同研究によって、世界各地におけるさまざまな一国史的言説を並べて比較しながら検討することにより、各国における歴史理解と世界観の特徴を明示できるだろう。 本年度開催した2回のセミナーによって、参加者の間での問題意識の共有が進み、2018年度以後に予定される論集の出版に向けての準備が順調に行われた。		
セミナーの運営組織	プリンストン大学（コーディネーター：Jeremy ADELMAN）		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容	外国旅費 金額 1,557,992 円 不課税・非課税取引に係る消費税 121,252 円 合計 1,679,244 円
	(アメリカ)側	内容	会議費 国内旅費
	(フランス)側	内容	外国旅費
	(ドイツ)側	内容	外国旅費

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外でどのような交流（日本国内の交流を含む）を行ったか記入してください。

日数	派遣研究者			訪問先・内容			派遣先
	氏名	所属	職名	氏名	所属	職名	
163	日間	松尾俊輔	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程	Sebastian Conrad	Free University Berlin	Professor	GHC大学院学生派遣プログラム ベルリン自由大学
103	日間	藤本大士	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程	Sebastian Conrad	Free University Berlin	Professor	GHC大学院学生派遣プログラム ベルリン自由大学

7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

・「この交流計画によって初めて切り開かれたと言えるようなグローバル・ヒストリーの可能性について、具体的な研究テーマを通じて学界に提示していく必要性」の対応としては、今年度発行された2冊の書物（羽田正編『グローバル・ヒストリーの可能性』、羽田正著『グローバル化と世界史』）が、十分にその役割を果たしうると考えている。また、4拠点の主要な研究者の協議により、新たに具体的な共同研究のテーマ（世界の一体化をめぐる一国的言説” National narratives of global integration”）が定まり、世界の学界に対しても重要な貢献をなしうる体制が整った。

・「国内の共同研究参加の東京圏の偏り」への対応として、今年度は、福岡や京都で国際研究集会を開催し、それぞれの地域の研究者に参加を求めた。また、長崎大学で研究集会を開き、関連研究者間での交流を進めるとともに、東京大学以外の若手研究者（具体的には、名古屋大、大阪大の学生）も、ジュニア・メンバーとしてイベントに参加できる体制を整えた。

・「旧被植民地国・発展途上国の研究者・研究機関を取り込む形での事業の拡大展開により、展望が開ける可能性を感じる」との指摘を受け、今年度は、南京大学、東華大学（以上、中国）、El Colegio de Mexico（メキシコ）など、指摘のあった地域の研究機関との学術交流の機会を持った。

8. 平成29年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本	アメリカ		フランス		ドイツ		メキシコ (第三国)		合計		
日本	1		0/0	(1/10)	0/0	(1/30)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(2/40)	
	2		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	8/221	(0/0)	0/0	(0/0)	8/221	(0/0)	
	3		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	2/116	(0/0)	0/0	(0/0)	2/116	(0/0)	
	4		6/41	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	1/5	(0/0)	7/46	(0/0)	
計		6/41	(1/10)	0/0	(1/30)	10/337	(0/0)	1/5	(0/0)	17/383	(2/40)		
アメリカ	1	0/0	(3/326)		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(3/326)	
	2	1/15	(0/0)		0/0	(0/0)	0/0	(7/56)	0/0	(0/0)	1/15	(7/56)	
	3	0/0	(1/305)		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(1/305)	
	4	0/0	(1/10)		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(1/10)	
計	1/15	(5/641)		0/0	(0/0)	0/0	(7/56)	0/0	(0/0)	1/15	(12/697)		
フランス	1	0/0	(1/32)	0/0	(0/0)		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(1/32)	
	2	1/10	(0/0)	0/0	(0/0)		0/0	(5/40)	0/0	(0/0)	1/10	(5/40)	
	3	0/0	(1/4)	0/0	(0/0)		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(1/4)	
	4	0/0	(0/0)	0/0	(3/12)		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(3/12)	
計	1/10	(2/36)	0/0	(3/12)		0/0	(5/40)	0/0	(0/0)	1/10	(10/88)		
ドイツ	1	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	
	2	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	
	3	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)		0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	
	4	0/0	(0/0)	0/0	(2/8)	0/0	(0/0)		0/0	(0/0)	0/0	(2/8)	
計	0/0	(0/0)	0/0	(2/8)	0/0	(0/0)		0/0	(0/0)	0/0	(2/8)		
台湾 (第三国)	1	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)
	2	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)
	3	2/7	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	2/7	(0/0)
	4	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)
計	2/7	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	2/7	(0/0)	
中国 (第三国)	1	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)
	2	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)
	3	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)
	4	0/0	(0/0)	0/0	(1/6)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(1/6)
計	0/0	(0/0)	0/0	(1/6)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(1/6)	
合計	1	0/0	(4/358)	0/0	(1/10)	0/0	(1/30)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(6/398)
	2	2/25	(0/0)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	8/221	(12/96)	0/0	(0/0)	10/246	(12/96)
	3	2/7	(2/309)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	2/116	(0/0)	0/0	(0/0)	4/123	(2/309)
	4	0/0	(1/10)	6/41	(6/26)	0/0	(0/0)	0/0	(0/0)	1/5	(0/0)	7/46	(7/36)
計	4/32	(7/677)	6/41	(7/36)	0/0	(1/30)	10/337	(12/96)	1/5	(0/0)	21/415	(27/839)	

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計					
4/4	(36/36)	3/11	(7/22)	1/2	(55/67)	27/71	(10/11)	35/88	(108/136)

9. 平成29年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	2,348,760	
	外国旅費	10,038,972	
	謝金	0	
	備品・消耗品 購入費	1,548,878	
	その他の経費	1,399,087	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	664,303	
	計	16,000,000	
業務委託手数料		1,600,000	
合 計		17,600,000	

10. 平成29年度相手国マッチングファンド使用

相手国名	平成29年度使用額	
	現地通貨額[現地通貨単位]	日本円換算額
アメリカ	52,500[ドル]	5,594,400 円相当
フランス	66,000[ユーロ]	8,665,800 円相当
ドイツ	40,272[ユーロ]	5,287,713 円相当

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。